

親友という他者：現代若者の人間関係

A Survey on the Meanings of the Close Friends for the Youths

岡 林 春 雄*

OKABAYASHI Haruo

要約：小学6年生による同級生殺害事件は、加害者・被害者がお互いに親しい関係であったため、若者の友人関係、とくに、親友の意味について波紋を投げかけることとなった。そこで、本研究では、若者の親友関係について調査を行い、小学6年時では“一緒にいる”ことが親友のキーワードであることが明らかとなり、そこから、若者の人間関係についての不安や葛藤が浮き彫りになった。すなわち、“一緒にいる”ことは“仲がよい”ことと必ずしも同義ではなく、“ひとり”と“みんな”の間で揺れる若者の心理がそこにはあった。教育現場等で大人が子どもたちに接するとき、“みんな”という集団圧力と集団の閉鎖性には気を配る必要があることが指摘された。

キーワード：親友，不安，孤独，ひとりとみんな

平成16年（2004）に起こった佐世保市大久保小学校での同級生殺害事件は、若者の人間関係の危うさをつきつけ、教育関係者のみならず多くの人々に衝撃を与えた。加害者と被害者の関係が、どちらかと言えば仲がよいというレベルではなく、ある時点においては“親友”と呼ばれる関係であったということは、ますます大人の原因—結果の思考（因果関係論）を混乱させた。すなわち、もともと仲が悪ければ、反発しあい、相手の存在を消してしまいたくなる、ということも感情的に理解できる。しかし、少なくとも、“親友”といった仲のよい関係になったヒトを、インターネットのホームページへの書き込みを巡ってトラブルがあったとしても、殺すことまでするのだろうか。突発的な出来事ではなく、計画的な殺人である。“加害者の少女は、被害者が死んだということが分かっていないのではないか。”“加害者には死の意味が分かっていないのではないか。”といったコメントが評論家等から出てくるのも、これまでの大人の因果関係論からは理解しづらい事件の展開があるからである。そこで、本研究は、上記の同級生殺害事件を若者がどのように考えているのか、そして、若者は“親友”をどのようにとらえ、どのような関係をもっているのか、という疑問から出発する。今、若者は人間関係の不調から、殺害・自傷行為とまではいかななくても、落ち込んでいる者が多いと言われている。そのような若者にとって、本研究が少しでもプラスの方向に作用することができれば幸いである。

調 査

調査時期：2004年6月（上記同級生殺害事件が起こった直後）

被調査者：山梨大学教育人間科学部1・2年次生90名（男：30名，女：60名）

* 学校教育講座

調査項目：

(A) 佐世保市同級生殺害事件に関して

(B) 親友に関して

- ・小学6年時ならびに大学時の親友との関係
- ・親友とは
- ・理想の親友

結果と考察：

(A) 佐世保市同級生殺害事件に関して

1) 驚いた：81名（90％）－男24名（80％），女57名（95％）

驚かなかった：9名（10％）－男6名（20％），女3名（5％）

2) 驚いた理由：

- ・小学6年生の行為だったから
- ・すぐ“殺そうと思った”と述べていたから
- ・自殺なら驚かないが、殺人だから。
- ・加害者の年齢が幼すぎた。小6の子が計画的に殺したなんて驚いた。
- ・誰しも同じ思い（誰かが憎くて殺したいという思い）は持っているが、実際に殺してしまったこと。

驚かなかった理由：

- ・いつか起きてしまうだろうと思っていた。
- ・今度は小学生か、程度にしか思わなかった。
- ・そういった事件（少年犯罪）が多いから。

3) その他のコメント

- ・“どうして？”ってこっちが加害者の女の子に聞いてみたい
- ・友情ははかなくもろい。一度、壊れたらもうだめなのかな？
- ・明らかに殺意があった犯行であり、小学6年生という年齢的な問題。私の育った環境では考えられなかった。
- ・文句を言われて腹が立ったり、うまく友達と付き合いえないと思うときは、誰にでもあること。それが、度が過ぎたのか、殺そうと実際に思うことに驚いた。どうして、そういう気持ちになったのかわからない。たとえ嫌いでもそういう気持ちになれることにビックリした。
- ・今の小学生というか、世の中のあり方がそのような風潮を起している気がする。小学生も情報量の多さから、そのような考えを小6くらいから、もっていてもおかしくない気がする。小5、6というと僕らが考えているよりもずっと大人のような気がする。
- ・むかついても殺せない。相手を怒らせる要素があったと思うけど、あまりに命について軽率すぎる。
- ・殺してしまったのは、原因は本当に些細なこと。どこの小学校でもある友達同士の喧嘩。つまり、どこの小学校で起きてもおかしくない事件、ということを見るとぞっとする。今の小学生が怖いことを考えているだけなのか、昔自分のクラスにもいたのか。
- ・私が小学校の頃は友人とけんかしてもすぐ仲直りをしていたものだが、佐世保の事件では“殺す”という感情が生じていて、私にとっては衝撃であった。
- ・“憎しみ→殺人”となってしまうこと。私も小6のとき、仲良しグループの友だちから悪口を言われたりしたことがあった。そこから逃げることや自殺を考えることはあったが、殺そうと思ったことはない。他に方法はなかったのかと思う。
- ・自分の文句を言われたぐらいで殺そうと思うなんておかしい。それによって自分の人生だけじゃなく、相手の人生、自分の家族の人生がどうなるのか考えなきゃいけないと思う。
- ・最近、自制がきかない人が多すぎるように思う。“人間”的な人間なら自制がきくはず。たとえば、子どもでも。
- ・いさかいがあっていらいだちがおさまらない場合、つかみ合いになるくらいなら理解できるが、相手の存在をなくそうと考え、それを行動してしまうことが安易に結びつきやすくなっていることに、コミュニケーション力やゲーム・メディアの存在などの社会と子どもを考えてしまった。

- ・ネット関係のトラブルということで、“小学生がネットか。頭がいいんだなあ今の子は”と思ったが、事の顛末があまりに軽く、それでケンカになるというのもどうかと思うし、実際、殺してしまうというのはあまりに幼稚だと思った。そして、少々落胆した。
- ・小学生がパソコンで自分のHPを作ったり、チャットをするような時代だなんて思っていなかった。心はまだ子どもなのに変なところで大人になりたいと思い、バトルロワイヤル等にはまってしまい、心の面で何かおかしくなってしまったんだと思う。おかしいところに気づかない親もおかしい。
- ・自分でも小6というときはとても不安定な時期であったと思う。しかし、どうして殺意というものが生まれ、それを実行してしまったのか、その背景がよくわからない。そういう時代の流れになってしまっているのか、それとも学校か、家庭か、何かしらの原因があると思う。自分がそのクラスの担任であったとしたら、一体何ができたのだろうと考えさせられた。
- ・すごく仲良しな友だちみたいだったのに、嫌がらせをされたくらいで、小6の子が殺人を考えたっていうのはすごく怖いと思った。親友を殺すなんて、普通出来ないと思う。
- ・ニュースで伝えられている動機としてはホームページ、チャット、交換日記での悪口だとされているけれど、それに対してすぐに“殺してやる”と思うことがまず驚きでした。2人は仲が良かったと報じられているのを聞いて、殺害以外に解決できる道があったのではないかと思う。

これらの反応から、今回の同級生殺害事件は、若者一般にとっても衝撃的だったことがわかる。反応の中には、世代差論的な発想から出てきているものもあるが、仲良しグループが“仲良く”しているとは限らない、という現実があることは共通理解のようである。

(B) 親友に関して

(1) 基礎データ

大学時（現在）“親友はいる”と答えたのは85.6%であり、“小学校6年生のとき親友はいた”と答えたのは70.0%であった。それに対して、“大学時親友はいない”（14.4%），“小学校6年生のとき親友はいなかった”（30.0%）と答えた人がいることは注目に値する。小学6年時が大学時より親友ができにくい状況にあるように思われる。また、小学6年時“親友がいた”男性よりも女性の割合が低いことは、小学6年時の女性の人間関係の難しさが垣間見える。“小学6年時も大学時も親友がいらない”と答えた人（女性）からは“親友とか別にいらなくていいです。いつも自分本位で考えて、自分が優位にいればそれでいいです。昔からずっと仲良くって本当に好きな子はいるけど、親友と呼んでよいかかわからない。”（自由記述の文章のまま）といった反応が出てきている。

表1
基礎データ

	小学6年時	大学時
親友 いる (いた)	70.0%(男：73.3% 女：68.3%)	85.6%(男：86.7% 女：85.0%)
いない (いなかった)	30.0%(男：26.7% 女：31.7%)	14.4%(男：13.3% 女：15.0%)

(N=90; N男=30, N女=60)

詳しく見てみると、小学6年時親友がいて・大学時も親友がいるのは59名（65.6%；男20名，女39名），小学6年時親友がいて・大学時親友がいらないのは4名（4.47%；男2名，女2名），小学6年時親友がおらず・大学時親友がいるのは18名（20.0%；男6名，女12名）

であり、さらに、小学6年時親友がおらず・大学時も親友がいないのは9名（10.0%；男2名，女7名）であった。この小学6年時と大学時の親友がいる・いないに関して度数での検定を行ったところ、有意差が見出された（ $\chi^2=6.30$, $df=1$, $p<.05$ ）。すなわち、小学6年時と大学時では親友という人間関係のあり方が違っている可能性が考えられる。

(2) 親友のいる人（いた人）の親友との関わり

小学6年時の親友との関わり、ならびに、大学時の親友との関わりについて示したのが図1である。小学6年時に親友がおり・大学時にも親友がいる人（N=59）の親友との付き合いを小学時と大学時で比較してみると、“親友はいつも一緒にいてくれる”で小学時の方が有意に高く（ $t=11.254$, $df=58$, $p<.05$ ），“親友は私が困ったとき相談に乗ってくれる”で大学時の方が有意に高く（ $t=2.257$, $df=58$, $p<.05$ ），“親友は私に批判的なことも言う”で大学時の方が有意に高かった（ $t=3.360$, $df=58$, $p<.05$ ）。すなわち、小学6年生のときの親友との関係は“いつも一緒にいる”ということが大学時に比べて重要であり、大学生になってからは、いつもいっしょにいるといった時間的、身体的・物理的な一体感よりも、“私が困ったとき”といった肝心要のときに相談に乗ってくれ、時には批判的なことも私のために思えばこそ言ってくれる、といった関係を重視している。

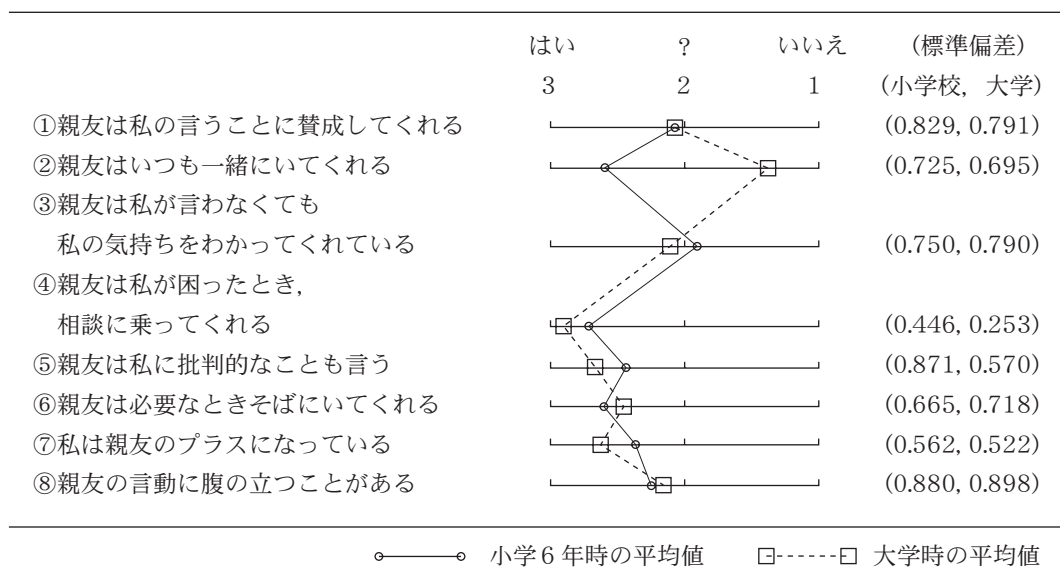


図1 小学6年時と大学時の親友との関わり

さらに、“親友の言動に腹が立ったときどのように対処するか（対処したか）”尋ねたところ、小学6年時では、“我慢した”“何も言わなかった”“へらへら笑ってごまかした”といった相手に対しては何もしなかったという反応が多く（38人中16人—42%），“怒った”，“けんか”，“反論”，“話し合い”を含めて何らかの意思表示をしたのは13人（34%）であった。同じ質問に、大学時では“嫌な気持ちををはっきり伝える”“文句を言う”といった自己主張する反応が多くなっており（44人中30人—68%），“我慢”，“聞き流す”というのは6人（13%）であった。

小学6年時に親友がおり・大学時に親友がいないという4人は、小学6年時に親友との関係で腹が立ったとき、全員“けんか”，“反論”，“言い返した”と意思表示をしている。意思表示の仕方が相手にとってきつかったのかもしれないが、その後、何らかの理由で彼らは親友を解消することになる。そして、彼らは親友をもつことに慎重になり、大学生になった今、親友に“対等な関係”を期待しながら、親友はいない。

(3) 親友とは？

“親友ってなんだろう？”と問いかけてみたところ、“自分の思っていることを誰でもかまわず打ち明ける人ってあまりいないと思う。そこで、自分の気持ちを素直に言える人、愚痴でも相談でも何でもいいからありのままの自分で接せられる人は大切だと思うし、そういう存在が親友なのではないか。”(女性)といった反応が出てくる。大学生にとっても友だちとの人間関係は容易なものではなく、相互作用というよりも自己中心的な発想から友だちをもとめる傾向が強いように思われる。全体に、男性からの反応は、“絶対にいて欲しいもの。宝のようなもの”，“心を完全に開くことが出来る友人”，“心の友。一緒に笑ったり、泣いたり出来る人”，“心の底から自分の心を開ける友だち。お互いに高めあえる存在”といった単純明快なものが多い。次に，“親友とは？”に対する代表的な反応を列挙しておく。

- ・お互い信頼できる人。自分の深いところを見せてもよいと思える人。
- ・何も話さなくてもギクシャクしないし、何でも言える一緒にいて楽な人。
- ・お互いの気持ちがある程度理解でき、お互い無理のない本音で付き合える人。
- ・良いことも悪いことも、本当に思っていることを言い合える関係。もちろん、お互いに必要とし合えて、支えあえる、持ちつ持たれつの関係。

これらの反応から、被調査者の日頃の人間関係の浅さが垣間見える。すなわち、日頃、自分の本音を出さず、他人に探られることを嫌い、ひたすら“自分”を隠しているのである。そのような人間関係に疲れ、親友にその癒しを求めているようにさえ思われる。この話題は、親友に何を求めるか、理想の親友像に繋がっていく。

(4) 理想の親友とは：親友に望むこと

小学6年時ならびに大学時の“理想の親友：親友に望むこと”をまとめたのが図2ならびに図3である。小学6年時、親友に望んでいることは項目②“いつも一緒にいてくれる”

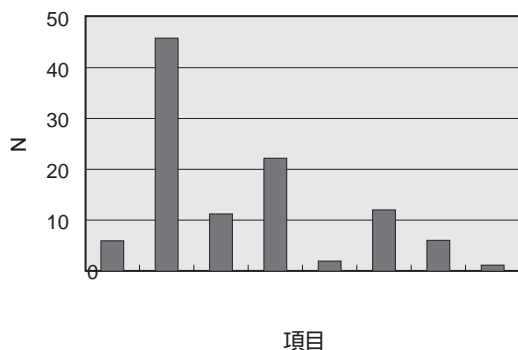


図2 小学6年時の“理想の親友”

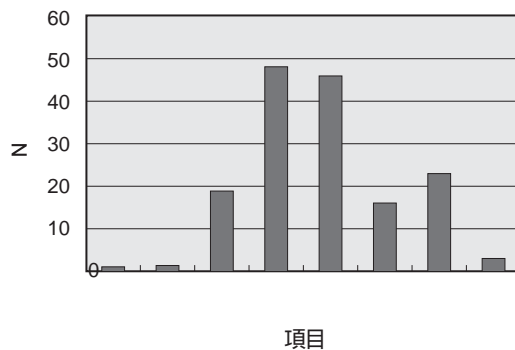


図3 大学時の“理想の親友”

■ 各選択人数 (注 項目番号は図1の項目に対応；複数回答あり)

が最も多く、項目④“私が困ったとき、相談に乗ってくれる”が続いている。とにかく時間的、物理的・身体的に一緒にいるということが重要視され、それがあればこそ、相談にも乗って貰う関係ができるということであろう。

大学時では、項目④“私が困ったとき、相談に乗ってくれる”，項目⑤“私に批判的なことも言う”が多く、項目⑦“私は親友のプラスになっている”，③“親友は私が言わなくても、私の気持ちをわかってくれている”，⑥“親友は必要なときそばにいてくれる”が続いている。自分がしてもらっただけではなく、自分が相手にできること，という感覚が出てきて、相互作用の関係が徐々に意識されだしているのかもしれない。

自由記述で出てきた小学6年時の“理想の親友：親友に望むこと”でも“何でも話せて、何でも賛成してくれて、いっしょに笑いあえる存在”というように“いっしょ”というのがキーワードである。“親友になったきっかけは？”に対する反応をそこに合わせてみると、小学6年時の親友との関係は明らかである（図4）。

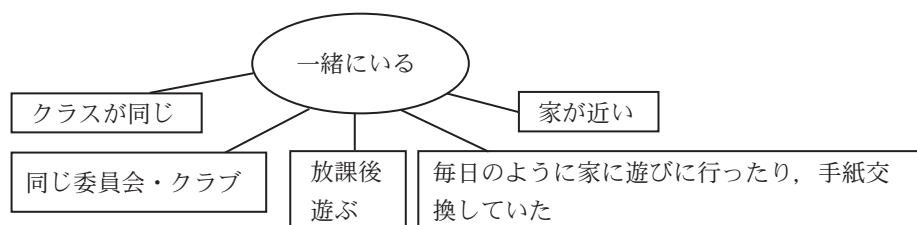


図4 小学6年時の親友との関係ならびに親友になったきっかけ

“小6のころの女の子は結構ドロドロしていた”（女性）といった指摘とともに，“（小学校6年～中学校にかけて）女の子はいつも一緒に行動する子が決まってしまうていて、その子のことを親友と定義しているのだと思う。”（女性）といったコメントが見られた。さらに、今から思い返せば，“いつもそばにいて一緒にいるのが親友ってことはないと思う。うわべだけの友だちなんてただの知り合いに近いと思う。”（女性）といった意見もあった。時間的、物理的・身体的に一緒にいることが小学6年時の親友の大きな条件である。

自由記述の大学時の“理想の親友：親友に望むこと”は，“お互いを認め合い、何も言わなくても、ある程度察してくれる。自分を助けてくれる。自分を頼りにしてくれる。気の置けない仲”というように“信頼できる”，“高め合える”，“言いたいことを言える”，“気を使わない”，“良き相談相手”，“理解者”といったようにいろいろな言葉が出てくる。これまで、周囲の状況からひかえていた自己表現を，我儘でもよいから，とにかく出したいというエネルギーが感じられる。

全体的考察

児童期の終わりから青年期は“家族という守られた関係性の中から自立し，社会的存在へと移行していく時期”と捉えられ，この時期に友人との信頼関係を築くことの重要性が指摘されてきた（例えば，高木，1996）。ところが，近年，わが国の青年の友人関係は一般的に“表面的”（影山，1999）だと指摘されている。表面的とは，“お互いの心の深みに立ち入らないこと”を指している。そして，友人（親友）関係のもつ機能として，松井

(1990)は“安定化”，“社会的スキル涵養の機会の提供”，“モデル”の3点を挙げている。しかし、これらの研究は、いずれも“青年にとって友人（親友）関係は大切だ”，“青年期の最大の課題は自我同一性の達成だ”という研究者側の暗黙の了解があり、主体としての青年自身がどのように友人（親友）関係をとらえているかの検討が不十分である、ということが指摘されてきた（宮下，1995）。

本研究はそのような研究視点批判を踏まえて、若者自身が親友関係をどのようにとらえているのかを重視した調査を行った。本研究の調査の結果、人間関係として親友を見たとき、小学6年時の親友は“一緒にいる”ことが重要である、ということが明らかになった。“一緒にいる”のは、時間的、物理的・身体的な問題であり、“家族という守られた関係性の中から自立し、社会的存在へと移行していく”とは次元の異なる問題である。一緒にいることへのこだわりは、小学6年になる前までの発達過程の中で、“いっしょ”感覚が満たされていないのではないかと考えられる。そのような心理状態の中で、“悪口”を言われたりすると、その“悪口”の内容を客観的に見直すといった余裕はなく、悪口を言われたこと自体が許しがたいこと、となってしまうように思われる。大学時の親友との関係は、精神的な安定がキーワードになりそうなのだが、まだ依存的であり、相手に対する甘えがあり、親友にしてもらうという感覚が強い。ある程度、精神的な余裕が出てこない、相互作用という関係が成り立たないように思われる。

人間関係を考えるとき、若者は孤独を嫌う。孤独は、自由な主体である個人が生まれた近代の産物だといわれる。橋本（2004）は、“自分のことを考える”が“他人のことを考える”になってしまうと述べ、日本が富国強兵の道を経て、夏目漱石が1914年、講演“私の個人主義”のなかで個人主義の“淋しさ”について触れたように、孤独を感じる近代人が誕生してくる、と指摘する。第二次世界大戦の敗戦を経て、日本の若者は安保闘争、反戦闘争といったいわゆる学生運動に関わることとなる。そこでは“連帯”が叫ばれ、個（ひとり）からみんなへの意識の高揚が現出された。その末期、若者の間で歌われた次のような歌がある（One Woman's Hand）。ここでは、“ひとり”と“みんな”が対置されている。ひとは弱い、みんなは強い。

『ひとりの手』

ひとりの小さな手 何も出来ないけど
それでもみんなの手と手を 合わせれば
何かできる 何かできる

（中略）

一人の人間は とても弱いけれど
それでもみんながみんなが集まれば
強くなれる 強くなれる
本田路津子訳詞 / ピート・シーガー作曲

そして、社会の変革を目指した動きがしばしば1970年代以降、人々の関心は新興宗教、占い（血液型相性判断を含む）、心理テストといったブームに示されるように、急速に“私”へと向かっていく。

今、若者の考える“私”とは何だろうか。私を意識したとき、“私はみんなからどのよう
 と思われているのだろうか？”といった疑問が出てくる。みんなから見られている自分。
 私はみんなと同じなのか？みんなは私をどのように見ているのか？・・・考えても“私”
 が見えてこない。せいぜい、友だちや親から、“あんたは〇〇だから”と言われたことし
 か思いつかない。周囲から言われた自分が自分なのか？“本当”の自分とは？本当の自分
 を出したいくない。みんなに愛に思われると困るから。私を考える視点は十分に自分には向
 かわず、みんなに向かう。私を考えることは、みんなを考えることに取って代わられる。
 私は独り。ひとりとみんな。自分（ひとり）と他者（みんな）の相互作用という関係を考
 えない視点は、結局中途半端に浮遊し、“私”を追及したことにならないし、他者（みな
 な）を追求したことにもならない。

ひよりは弱い、みんなは強い。小学校や中学校で、“みんながあんたのことをシワイと
 言っているよ。”と言われたときのことを考えてみよう。“みんな”が人類すべてではない
 ことはわかっているのに、“みんな”に言われていると表現されたことに傷つく。そう表
 現した話者の関与は誤魔化されているにもかかわらず、である。これがもし、“Aさんが
 あんたのことをシワイと言っているよ。”であれば、Aさんに抗議し、そう言った話者に
 対して、“じゃ、あなたはどう思っているのよ。”と詰め寄ることができる。“みんな”は
 それだけの圧力がある。集団圧力・同調圧力である。

親友が離れていくときの対処

今回の調査を行ってみて、発展的な問題があることに気づかされる。これまで指摘され
 てきたように、一般的に最近の若者は人間関係が表面的であるのだが、一度親友という関
 係になった後、何らかの行き違いが起これ、その親友が自分から離れていくという事態に
 なったとき、なんとも言えない不安とそれに伴う攻撃性を有する傾向が高いように思われ
 る。つまり、友達（親友）が去ろうとしたとき、その事態を断固として認められない若者
 が多いように思われる。友達が自分から離れていく、ということは当然のことながら辛い。
 しかし、何らかの理由で意思の疎通ができなくなり、これまで親友だと思っていた人が自
 分から去っていく、ということは環境の変化とともに起こりうることである。ところが、
 それが認められないのだ。親友が離れていくということは、自分の存在意味を否定される
 ような極端な感覚になるのである。表面的な関係ゆえに、離れていく理由への言及やその
 理由に対するお互いのすりあわせがあるわけもないのに、友達が離れていくのを見送るこ
 とができず、しつこく追いかけ、時と場合によっては攻撃的な行動（自傷行為を含む）を
 取ることによって、犯罪レベルの社会的問題が起こってくる。具体的な対処行動を取らな
 いまま、頭の中であれこれ考えていると、人間の思考はだんだん悪循環していく。自分で
 勝手に悪いことを想像するのである。佐世保市大久保小学校の事件もこのケースの可能性
 がある。被害者は加害者から離れていこうとしていたのではあるまいか。加害者が説明を
 していないので、これはあくまでも仮説なのだが、加害者の立場から、被害者が自分から
 離れていっていると事態を捉えていたのではないか。それで、加害者は、自分を否定され
 たような気になり、否定され・殺されそう”になっている自分を守るために先手を打っ
 たのではあるまいか。この殺人という攻撃性行動のエネルギーの中核には、“自分の居場
 所（HP）に土足で入って荒らしていった”という怒りの感情がある。この感覚的な気持
 ちは、小学生では言語化できないかもしれない。

教育現場での対応

今回の調査から、若者たちは小学6年時、時空間を共にする“一緒にいる”人間関係を親友と考えていることがわかる。しかし、一緒にいる親友が、表面的には仲良く見えても、実はいじめたり、いじめられたりといった人間関係を内包している。とくに、この特徴は女子小集団において起こる可能性が高く、女性からの反応で、“小学6年から中学時代の友だちとの人間関係は最悪であり、本当に信用できる友だちはいなかった”といった報告もある。木之下・菅（2004）が指摘する“神経戦の戦場”と化してしまった教室（クラス）の様子が垣間見られる。では、そのような人間関係・友人関係が存在している教育現場では、どのようなことに気をつける必要があるのだろうか。

まず、教師を含めて大人は、子どもたちが一緒にいることを仲がよいと捉えないことである。一緒にいるのは、物理的・身体的な事実であるが、それを“仲がよい”ととらえることはそれを見ている人の“解釈”である。この解釈が現実の理解を惑わすことになる。常に一緒にいる小集団の中で行われていることが見えなくなるのである。いじめられるのなら一緒にいなければいいのではないか、というのが大人の見方であろうが、もともといじめられている子には、友だち選択の自由はない。それが集団圧力であり、“一人でいること”、“孤独”への怖さである。

もともと、誰を親友にしようと、誰と仲良くしようと本人の自由なのではないか、という考えが大人にはある。自由といわずとも本人の主体性が、親友ならびに友だち選びにはかかわっているはずだ、と考える。しかし、今の若者を取り巻く状況は、自由や主体性が自然と身につくようにはなっていない。少なくとも、小学6年時で、自由や主体性が身についている若者は少ないと考えるべきである。自由や主体性を身に着けるには、経験や認知能力が必要である。自己認知能力、他者認知能力、事象認知能力は経験と相互作用して発達する。

われわれ大人が作り出した生活環境は、子どもたちの自然発達を阻害する作用を多分にもちあわせている。あまりにも人工的な生活環境の中で、子どもたちは人間関係の自然発達ができないまま児童期そして思春期（青年前期）に入ってくる。閉じられた学級集団の中で、子どもたちは自分の居場所を探す。とりあえず、“自分の座る机・椅子”、“出席番号”といった物理的な居場所を確認し、そこからお互いのインフォーマルな関係の中での居場所を見つけ出そうとする。これがいわゆる“仲よし”集団であり、本調査でその実態は、休み時間などに“一緒にいる”人だということがわかる。“ひとり”は怖いのである。いじめは“ひとり対集団（プチみんな）”の形態をとることが多い。学級集団も、その中での“仲よし”集団（小集団）も、ともに若者にとっては閉じられた集団になってしまっている。閉じられた集団の中では、外からは見えにくい歪んだ関係が生じやすい。小学校から中学校の学校生活の中で、多くの若者は親友を含めての人間関係に傷つき、その傷を癒しかかっているのが大学時代かもしれない。小学・中学時代に、若者を閉鎖的な環境の中にとどめ置くのではなく、児童・生徒間の相互作用を通して空気が通う環境作りの気配りを大人はすべきであろう。

結 語

今、若者は孤独^{ひとり}を恐れている。“恐れている”というより“不安に不安を積み重ねてい

る”のかも知れない。“恐れ”には具体的な対象がある。“不安”には具体的な対象がない。なんとなく、漠然とした、といった不安感情の中で、若者はより不安な状況に自分たちを追い込んでいっているようである。精神科医・斎藤（2001）は、今の若者を表現するキーワードに“イメージとしての空虚さ”を挙げる。一人でいることを恐れ、携帯電話で浅く広いコミュニケーションをとる多数派の若者と、その対極にある対人関係不全な引きこもり系の一群。前者は、本当に孤独が不安な状態であるのかわからないのに仲間を求め、薄く浅い関係を築こうと必死になる。自己イメージが希薄なので、ひとたび集団から離れると、空虚さを抱え込むことになる。一方、後者は自己像がぶれにくい、集団に自分が承認されていないのではないかと想像し、変えることのできない自分とのギャップに空虚さを見て、不安を深めていく。どちらも、孤独であることと孤独を感じることの中間を掘り下げていない。幻想かもしれない孤独や他者とのあるべき距離をめぐって揺れている。ひとりとみんなの間で揺れる若者にとって、親友というのは大きな意味をもってくる。親友は他者である。しかし、他者である親友が、ひとりとみんなを繋ぐ重要な架け橋となるのは間違いないであろう。

付記：調査にご協力いただいた学生諸君に感謝します。親友がいても、いなくても、真剣な反応を寄せてくれました。自分の心情を吐露する機会を捜し求めているようにも感じました。学校という知識注入システムの中で生活する若者の心情は、抑圧されているのかもしれない。

参考文献

- 橋本治（2004）いま私たちが考えるべきこと 新潮社
影山任佐（1999）“空虚な自己”の時代 日本放送協会
木之下隆夫・菅佐和子（2004）クラスに悩む子どもたち 人文書院
松井 豊（1990）友人関係の機能
菊池章夫・斎藤耕二（編）ハンドブック 社会化の心理学（pp.,283-296）. 川島書店
宮下一博（1995）青年期の同世代関係
落合良行・楠見孝編著 講座生涯発達心理学 第4巻（pp.,155-184）. 金子書房
斎藤環（2001）若者のすべて：引きこもり系vsじぶん探し系 PHPエディターズグループ
高木秀明（1996）仲間関係と青年
久世敏雄編著 青年心理学その変容と多様な発達の軌跡（pp.,46-56/74-81）. 放送大学教育振興会